

国際派日本人養成講座

人物探訪

沖縄県民20万人を救った二人の島守(下)

米軍侵攻を目前にして島民の北部疎開と食糧確保に二人の島守は全力をあげた

「国際派日本人養成講座」
(http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogindex.htm)では、毎週、新しいコラムが紹介されています。

※これを読めば自然に、日本の文化や歴史に関心ももてるような話を毎週掲載しています。より多くの二世の方や日本語学習者に読んでもらい、少しでも日本に興味を持ってもらえるよう、最寄りの日本語学校や日系団体の掲示板に張ったり、普段は邦字紙を読んでいない兄弟や子や孫などに記事を紹介してください。(ニッケイ新聞編集部)

1. 「この長官は自分たちを捨てていかない」

島田は第27代沖縄県知事として、昭和20(1945)年1月31日、着任した。着任の挨拶では、相次ぐ空襲下の職員の苦勞を労った後、

沖縄県は全国民の耳目を集めている。敵機空襲を最初に受け、戦火の中を戦ったのだから、沖縄県から率先垂範し全国民の士気を高揚させよう。無理な注文かもしれないが、先ず元気にやれ！ 明瞭にやるうじやないか。「1、p157」

職員たちは、この長官は自分たちを捨てていかない、この人なら最後までついていける、と思っ

着任数日後に島田を訪ねた地元有力者が「前知事は逃げてけしからん。知事さんも大変です」と言つと、島田はこう答えた。

2. 2カ月で9万人の疎開計画

ちなみに前知事は更迭時、「現地軍から要請のあった県内疎開を協議する」との名目で上京中で、そのまま香川県知事に転出し、昭和59(1984)年に86歳で亡くなるまで、二度と沖縄の土を踏むことはなかった。「単行者」と呼ばれることを恐れながら、長い余生を生き続けたのかもしれない。

行政手腕は鮮やかというほかなかったです。ねえ、私だって死ぬのは怖いですが、しかし、それよりも単行者といわれるのは、もっと怖い。私が来なければ、だれかが来ないといけなかった。人間には運というものがあつてね。「1、p160」

3. 疎開を逃る県民の説得

島田知事と荒井警察部長の二人を中心に、県庁職員が一つにまとまって、「一人でも多くの県民を救うための奮闘が始まったのである。」

「6カ月分の食糧確保」も難題だった。当時の保有米は県民消費の3カ月分がやっとという状況だったので、特使を台湾に派遣して、米の移入を交渉させた。

4. 「どうか、沖縄県民を助けてください」

講義が済むと民家の実情視察である。あらかじめ訪問先は決めてあるのだが、「小渡君、ちよつとあ

の家に寄つていこうや」と予定外の家にも入つていき、話し込む。疎開を逃るの、農地や家畜のことを気にしている場合が多いのだが、その様子を聞いてやつたうえで、「それでも危ないから疎開した方がいよ」と説得する。

5. 「敵さん、なかなか鮮やかだね」

3月23日朝から、米軍上陸の前の空襲が始まった。米艦載機の延べ千数百機による執拗な空襲が全島を覆った。さわやかな南の島の朝は、たちまち修羅場と化した。

6. 壕内の生活

島田は職員を数キロ離れたいくつかの壕に分散させた。そこから老幼婦女子の北部疎開、食糧の配給、そして避難壕の整備・構築の指揮をとった。

7. 避難民を救え

4月1日に上陸を開始した米軍は、日本軍の頑強な抵抗に遭いながらもじりじりと南下を続け、24日には首里、那覇地区からの非戦闘員に東南部への非難命令が出された。

8. 島守の塔

5月末には第32軍は百里戦線から撤退し、最後の抵抗拠点である沖縄本島南端の摩文仁へ移動した。島田は牛島軍司令官と最期を共にすることを決意し、6月8日には県庁を解散して、職員たちを

9. 広州駅前で襲撃9人けが

【広州共同】中国広東省広州市の警察は6日、広州駅前同日午前8時20分(日本時間同9時20分)ごろ、刃物を

中国、実行犯1人射殺

【共同】6日の東京株市市場は、欧州中央銀行(EBCB)による好意的金融緩和の開始を好んだことなどで、日経平均株価(225種)は続伸した。一時、約14年10カ月ぶりの高値水準を叩き、節目となる1万9000円に迫った。

東証、1万9千円迫る

【共同】6日の東京株市市場は、欧州中央銀行(EBCB)による好意的金融緩和の開始を好んだことなどで、日経平均株価(225種)は続伸した。一時、約14年10カ月ぶりの高値水準を叩き、節目となる1万9000円に迫った。

独立国かは「回答困難」

【共同】政府は6日の閣議で、19世紀後半に日本政府に併合された琉球王国が独立国かどうかについて、「琉球王国」をめぐる当時の状況が必ずしも明らかでなく、確定的な国際約束がなく、確定的なことを述べるのは困難とする答弁を決定した。

島田は職員を数キロ離れたいくつかの壕に分散させた。そこから老幼婦女子の北部疎開、食糧の配給、そして避難壕の整備・構築の指揮をとった。

島田は「壕内」で生活した。壕内には台湾でもその人柄を慕う人がいて、総督府からの払い下げについて何度も援護射撃をしてくれ、そのお陰で3千石の入手ができた。

しかし、輸送船の手当がつかない。総督府の交通局に嘆願した所、前日、同じく食糧確保に困っている台湾東部の花蓮港行き船便を手配した所だが、そこから譲ってもらおうよう頼んではどうかという答えだった。

相手は、花蓮港警務課の江口貞吉課長だった。島田は直接、江口と自ら電話でかけた。相手が県知事と知って、平課員の江口も驚いたろう。しかし、島田は地位の上下も関係なく、沖縄県の窮状を訴え、「江口さん、どうか、沖縄県民を助けてください」と頼み込んだ。

江口は「せつかく都合した船便なのに」と全身の力が抜け落ちるような落胆を味わいながらも、「沖縄の窮状に比べれば、花蓮港の事情はまだ良い方ではないか」と思い直して、「それでは致し方ありません。どうぞ大事にお持ち帰りください。ご苦勞の程お察し申し上げます」と答えた。

島田の真摯な姿勢とそれに応えた江口の善意により、3千石の米は無事、那覇港に届けられた。警察官たちが徹夜で米を船から降りし、県庁構内にあった武道の練習所・武徳殿に運び込まれた。道場だけで100坪もある広い建物に天井近くまで積み上げられ、それを軍用トラックで各地に積み出されていった。この米によって、多くの県民が飢餓から救われることになる。

4月1日に上陸を開始した米軍は、日本軍の頑強な抵抗に遭いながらもじりじりと南下を続け、24日には首里、那覇地区からの非戦闘員に東南部への非難命令が出された。

南下する避難民の受入体制を整備すべく、27日に南部の市町村長17名と警察署長4名、随行者を含め100人近い人間が壕の中の70畳敷きほどの大広間に集まった。壕中の爆撃を避けるために時には地面に這いつくばったせいで、泥まみれの姿だった。

島田は「食糧も壕も十分なことば万々承知しているが、生死を共にしている今こそ、同胞愛を發揮して貰いたい」と頭を下げた。

また「戦いがいかに激しく、また長びくとも、住民を飢えさせることは行政担当者として最大の恥」と強調し、芋の植え付けや麦、大豆の収穫を夜間、月明りを利用して行うよう指示した。

会議は6時頃に終わり、市町村長らは艦砲射撃の途切れるのを狙いすまして、それぞれの自分の市町村に帰って行った。住民保護の重責を担って、荒井は目を潤ませながら見送った。

島田の指示は南部の町村で実行に移された。農民は一層の食糧増産を申し合わせると共に、「避難民はどの畑からでも作物を自由に取って食べて良い」と各村で決議した。これによって救われた避難民も多かったと思われる。

5月末には第32軍は百里戦線から撤退し、最後の抵抗拠点である沖縄本島南端の摩文仁へ移動した。島田は牛島軍司令官と最期を共にすることを決意し、6月8日には県庁を解散して、職員たちを

島田は「生きて沖縄再建のために尽くさない」と脱出を命じた。

親しくしていた新聞記者が別れの挨拶に来て、「知事さんは赴任以来、県民のためにもう十分働かれました。文官なんですから、最後は手を上げて出られてもいいではありませんか」と小声で言った。すると、島田はキッと顔を上げて答えた。「君、県の長官として、僕が生きて帰れると思うかね？ 沖縄の人がどれだけ死んでいるか、君も知っているだろう？」

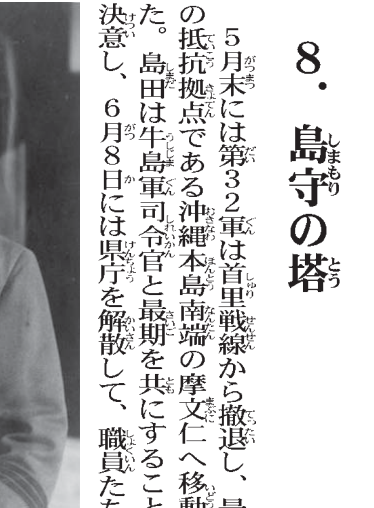
軍司令官が敗戦と将兵戦死の責任をとって自決しなければならぬように、幾多の県民を死なせた地方長官も、その責めを負わなければならない、というのが、島田の覚悟だった。

牛島軍司令官は6月23日、摩文仁の軍司令官部で自決し、沖縄戦の組織的戦闘は終息した。その数日後、荒井はアメーバ赤痢で亡くなり、島田は近くの海岸の自然壕でピストルで自決したと見られている。

島田と荒井としては、県民を十分に保護できなかったとの思いであるが、20万人にのぼる県内外への疎開、台湾米の移入などで多くの県民が命を救われたのは事実である。

摩文仁の丘には、50もの慰霊塔、慰霊碑が林立しているが、その中でいち早く建てられたのが、島田、荒井を初めとする戦没県職員458柱を合祀する「島守の塔」である。

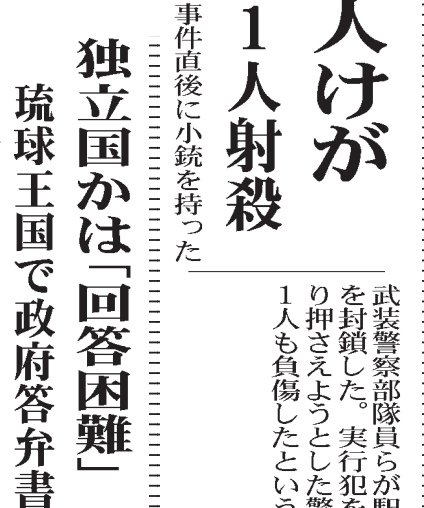
沖縄戦の6年後、傷跡がまた生々しい昭和26(1951)年に県民の浄財を集めて建立されたもので、島田、荒井を筆頭とする県職員への沖縄県民の感謝の気持ちが込められている。(文責：伊勢雅臣)



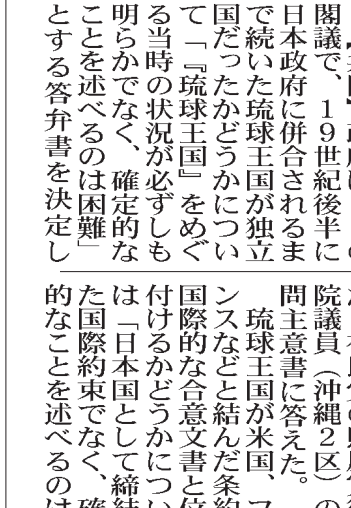
牛島軍司令官



牛島軍司令官



牛島軍司令官



牛島軍司令官

